

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月14日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02179

研究課題名(和文)黄河流域の村廟と祭祀芸能活動「社火」からみた民間信仰の地域的多様性と社会的結合力

研究課題名(英文)The Regional Diversity and Social Cohesion of the Folk Beliefs through the Study of the Village Shrine and the Shehuo in the Yellow River Basin

研究代表者

櫻井 龍彦 (SAKURAI, TATSUHIKO)

名古屋大学・人文学研究科・名誉教授

研究者番号：60170643

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は山西省の黄河流域の村廟を中心に、「社火」という民間の祭祀芸能活動の祭祀組織とその実践活動である芸能や信仰の実態を調べ、土着の民間信仰が地縁社会ではたず社会的結合のあり方と地域に埋め込まれた信仰が一般化、広域化していく動態過程を明らかにすることにあつた。祭祀芸能については「楽戸」と「咽喉廟」、民間信仰の地域的多様性については「二仙」、「湯帝」信仰とその廟の分布状況、地縁社会での社会的結合については「接姑姑迎娘娘」行事などから研究した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中国における村落社会の社会的結合のあり方を宗教民俗学の立場から明らかにした点に意義がある。中国農村の社会構造や人倫関係をみるには、血縁的な宗族と地縁的な組織がどのような習合的形態をもって機能しているかをみる必要がある。

本研究は近年復興している廟会や祭祀組織の活動を地方政府との権力関係や村落自治の動向などをふまえ、社会変動によって変容、再編していく農村において民間信仰がはたず役割について考察した。

研究成果の概要(英文)： To study the village shrine and the Shehuo (folk club performance on religious service) in the Yellow River basin of Shanxi Province as the purpose, with the methods of field investigation, expert interview, and so on, this study does the research and analysis on the actual situation of the folk beliefs and their social role in the traditional "rural society".

I clarified two points of the next as result. (1)Power of the social cohesion of the indigenous folk religion in the community of the rural society, (2) Dynamic process in which the faith embedded in the area generalizes and widens.

研究分野：人文学

キーワード：宗教民俗学 文化人類学 祭祀組織 民間信仰 中国 山西省 廟会 楽戸

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 1980年代に始まった改革開放政策以降、中国は大きな社会変動を経験した。人々の精神生活を支える信仰的側面而言え、各地で宗教施設である廟宇が修復され、祭祀活動である廟会とそれを推進する信仰組織である「香会」が復活した。長い間、迷信として否定されてきた祭祀の復活は、宗族の復興や祖先祭祀の実施を促し、人々の帰属意識が覚醒する機会ともなった。

廟会とそれに奉仕する祭祀・娯楽芸能組織の研究について、本研究者はこれまでに平成16～17年度に萌芽研究「妙峰山廟会における民衆の信仰組織(香会)とその活動に関する基礎的研究」、平成18～21年度に基盤研究(B)「北京・天津を中心とした華北の廟会と祭祀組織「香会」の実態研究」、平成24～26年度に基盤研究(C)「碑文、絵画、画報資料を利用した祭祀芸能組織の研究及びその利用に関する方法論の確立」が採択され、研究成果を5冊の報告書として刊行した。

調査した地域は北京と天津を中心とした華北であり、もともと農村部であったところが都市化政策によって再開発され、行政上は社区(コミュニティ)として再編された地域であった。対象とした碧霞元君や媽祖のような主神は、支配階級の皇族による信奉とかかわる権威ある神であり、廟と祭祀芸能組織は伝統的に統治者への奉仕によって利益と保護を得ていた。このような国家祭祀の庇護下にある廟会の凝集力は、血縁や地縁を超える広範囲な地域に及んでいて、その研究は国家と村との権力関係、秩序規範などを理解する上で重要である。

しかしそれとは別に、農村部には小廟を中核とした村落の自律的な信仰体系があり、それが伝統的な慣行や紐帯として機能していて、村落の自発的な統治ともかかわる現実がある。中国の伝統社会を民間信仰の視角から理解するためには、村落内外の比較的限定的な規模で、なんらかの利益共同体を形成している土着の特徴的な神々と組織を考察する必要がある。過去の3つの科研費研究から導き出されたこのような問題意識を背景に、本研究では調査対象を河北、山東の華北地域から西の黄河流域にスライドし、都市から農村にシフトして、過去の科研費研究の主題と連続性を保ちながら、村落社会における廟会と祭祀芸能組織の研究へと移行した。

(2) 中国における村落社会の社会的結合には、血縁的な宗族と地縁的な互助組織がどのような習合的形態をもって機能していたかをみる必要がある。血縁と地縁で形成される集団が伝統的にはたしてきた役割は地域によって異なり、多面的に展開するので一律に概括するのは難しい。血縁と地縁が重なる場合、両者が相互補完的な場合、あるいは状況に応じて関係が流動化する場合などがありうると考えられる。その多様で動的なあり方を歴史的条件をふまえ、現状の観察によって村落内の人的結合および村外との社会的結合が時代を経てどのように変遷し、維持されてきたかを考察することは、現代中国農村社会の内実や構造を理解する上で重要である。また一般的には宗族制度は南方では顕著だが、北方では緩やかに機能しているとも言われ、そうした実情を廟や祭祀活動の観察によって個別具体的に研究したものはまだ多くはない。それを山西省とくに西部と南部の黄河流域で実施する理由は、この地域は黄河流域の古代文明の発祥地であり、古層の文化や伝統が多く残り、土着の民間信仰が多様かつ豊富に浸透しているからである。近年、無形文化遺産の保護という国家政策に呼応して、山西省でも民間の祭祀芸能行事である「社火」が地域振興のために組織化されている。迷信ではなく文化資源として位置づけられることで活動も正当化され、調査の機会も得られると判断したからである。

## 2. 研究の目的

本研究は宗教民俗学の視点から山西省黄河流域に分布する廟会に焦点をあて、祭祀組織とその実践活動である「社火」の実態を調べ、民間信仰が地域社会ではたす人的、社会的結合の様相を考察することを主目的とする。それによって封建迷信とされてきた民間信仰が村落共同体の基層部分でどのように機能し人々をつなげているかが明らかになり、現代中国における農村社会の構造的特徴が宗教民俗学から位置づけられる。この研究目的を達成するために、具体的に以下の個別目的を設定し、それらを有機的に関連づけて研究を総合する。

(1) 村廟の地理的分布の特徴をまず把握し、特定の神霊への信仰にどのようなローカルな特性があるかを明らかにする。

(2) 村廟の祭事を中心とする「社火」の祭祀組織とその実践活動である芸能の実態を調べ、管理、形式、種類、規模、内容などからどのような地域的多様性があるかを明らかにする。

(3) 土着の民間信仰が地縁社会ではたす社会的結合のあり方と地域に埋め込まれた信仰が一般化、広域化していく動態過程を明らかにする。

## 3. 研究の方法

民間信仰は成立宗教と違って、在地の民俗・習慣に基礎づけられ、地域の自然環境と歴史に醸成された伝統文化的な性格が集積している。本研究は民間に潜在する自然信仰や神霊観念の多様な宗教現象を民俗学の視点から考察する宗教民俗学の方法論を求め、したがって現地調査による観察と聞き取りが主な手法となる。

現状の理解には今現在を形成する歴史的経緯の把握が先立つことは当然の前提である。廟には物質史料として記念、功德の顕彰碑が残存しているので、その活用が必要である。

具体的には以下の課題にそって現地調査を進めた。

#### (1) 碑文の確認と撮影

廟内には多くの石碑が残されているので、写真撮影をして碑文を収集する。

山西省の碑刻史料は明清時代のもので中国で一部出版されている。網羅的ではないが参考にはなるので、写真撮影したものと対照しながら解説をすすめる。

#### (2) 女神信仰の種類と分布

山東省泰山を中心に華北に広く分布する碧霞元君への祭祀は山西省でも見られ、Lu 城県崇道鎮賈村にある碧霞宮の調査によって実態を確認する。

また洪洞県の「接姑姑迎娘娘」と沁河流域の村落に多い二仙信仰の廟を調べる。

祈雨との関連では后土娘娘を祀る「后土祠」を調べる。

また信仰圏の伸張現象をみるために隣接する河北省涉県の女神である Wa 皇宮も調査する。涉県は当初予定に入っていなかったが、晋東南の廟会調査の過程で重要性を知り、踏査地に入れた。

#### (3) 祈雨

磧口鎮の水神「黒龍王廟」と各地の龍王神、后土神を調べる。

農作物の祈願とかかわる地母神の後土は雨乞いの神として支配階級が管理するものもある。

山西では介休市や万栄県にある后土祠でその事例をみる。

殷の神話に由来する湯王は古来雨乞いの神として祀られた。地域的には起源伝説との関係で陽城県と澤州県に偏在しているので集中的に調べる。

#### (4) 楽戸と職業神

祭祀芸能の組織として楽戸を調べる。楽戸の研究は当初予定には入っていなかったが、現地調査の過程で可能になり、2 年目から対象に加えることになった。楽戸の子孫を訪問し、業神である咽喉神の廟を調べる。

#### (5) 迎神賽社と儺戯に関する資料収集

曲沃県任庄の扇鼓神譜抄本の保存者を訪問し、宣統年間の手抄本『扇鼓神譜』を写真撮影する。

Lu 城市賈村で「迎神賽社」の社首（祭祀組織のリーダー）に会い、「社」運営の聞き取りと関係資料を入手する。

### 4. 研究成果

(1) 初年度の平成 28 年度は晋西と晋西南の地域を中心に調査した。晋西では磧口鎮黒龍廟、寨則山觀音廟・関帝廟・三官廟・五道廟・河神廟を、晋西南では洪洞県唐堯故園、万安鎮歴山舜廟、臨汾市魏村牛王廟、曲沃県任庄村などが調査できた。

平成 29 年度は晋南、晋東南を中心に、介休市后土廟、万栄県栄河鎮后土祖廟、東邑村龍王廟、Lu 城市城隍廟、碧霞宮、玉皇廟、関帝廟、晋城市玉皇廟、関帝廟、澤州県神南村及び陵川県東頭村などの咽喉祠を調査できた。

最終年度の平成 30 年度は、これまでの成果から晋東南に多様な廟と民間信仰が多く分布することがわかり、この地域に調査を集中させた。Lu 城市、高平市の二仙廟を 5 ヶ所、陽城県の湯帝廟を 7 ヶ所、澤州県の湯帝廟を 3 ヶ所調査できた。聞き取りは昨年を引き続き、Lu 城市賈村の「社」のリーダーと辛安泉鎮の楽戸の中心人物が応じてくれた。

(2) 研究期間内に成果物となったのは、論文が 2 本、中国の大学での講演・発表が 2 回である。聞き取り調査による文字起こしは、A4 原稿で総 185 ページになる（ただし最終年度の 2018 年度分の録音記録は未完成のため除く）。廟内の石碑文は可能な限り写真撮影をしたが、その数は膨大になり、今後順次整理していく。

(3) 万安鎮歴山舜廟では古老から「接姑姑迎娘娘」行事の聞き取りをした。この行事は神話上の人物である堯の娘であり舜の妻となる二人の娘の神像を村々で巡幸するものであり、旧暦 3 月 3 日と 4 月 28 日に盛大に行われる。民間伝説に由来する祭祀は、神輿が巡回する路線上の村々が共同で演出する儀礼であり、この活動によって村落相互間の交流と結合が形成されているという点で注目すべき事例である。村落間に血縁関係はないが、共同祭祀によって異なる地域間に親縁関係ができるという役割を民間信仰がもつことがわかる。地縁関係を親密にする「祭祀圏」の核心は女神への信奉であり、それが村落内部および郷鎮の世俗的な統治や秩序を整合する力をもっていることを示している。

(4) 晋東南には流通、分布範囲に地域性をもつ特定の神信仰がいくつかあるが、二仙廟と湯帝廟に関して集中的に調査をした。陵川県西溪の二仙廟にある「重修真澤二仙廟碑記」(1165 年) に二仙信仰の起源伝説が書かれている。二仙とは唐代、楽氏の二人の娘で継母の虐待にあうが、成仙して人々の苦難を救済する神となる。雨乞い、治病、子授けなど多方面の靈驗をもつ守護神となるが、主たる靈力は祈雨で発揮された。壺関県紫団山の真澤二仙廟が活動の中心で、壺関、高平、陵川、澤州の 4 県に廟が集中していることから、地域的な偏在がわかる。湯帝は陽

城県を中心に伝説や信仰が広まっており、廟も澤州一帯に集中的に分布している特徴がある。ただし神信仰は地域的に排除し合うものではなく、多神による効験の強化は歓迎されるものなので、どの地域でも廟の併存がみられる。

(5) 二仙、湯帝信仰の中核となる祈雨目的の祭祀は、単姓宗族のような血縁内にとどまる活動ではない。複姓の宗族を結集させ地縁的の広がりをもつ。農耕社会にとって水利灌漑は村落共同体の存亡にかかわる重要事項であり、山西省のように自然地理環境の影響で干ばつに苦しんできた地域では水の確保は血縁を超えて地縁的に強固な組織を造らなければ共同体としての村落は存立しない。前近代において人為では克服できない降雨の自然現象には祈雨という宗教呪術的な行為でしか対応できなかった。そこで祈雨を目的とする神への信仰が生まれ、関連の神々を祀る廟が多く建立される。

晋東南には二仙や湯帝をはじめ実に多様で地域の特徴をもつ祈雨を中心とした廟が見られる。現代では祈雨が干ばつ打開の有効性を持つものではないが、儀礼として伝承されていることがあり、運命共同体の集団行為としてもつ意義を明らかにした。祈願祭祀は一般的には村が組織、統一し、全村民が参加する集団的祭祀であった。祭祀は社首と呼ばれるリーダーが先導した。

(6) 祭祀芸能組織では楽戸を調べた。楽戸は北魏の時代までさかのぼれる楽籍の階級民で、廟会などで行われる祭祀芸能活動「社火」の音楽、演芸面を担当する特殊な職業集団である。いま楽戸の伝承者は激減しているが、辛安泉鎮西流と陵川県礼義鎮東陳丈溝の楽戸末裔に会うことができた。前者はまだ現役として活動を続けていた。本来階級民であったので活動の継承は親族内の世襲による。

楽戸は咽喉神という特有の職業守護神を信奉している。現存するものは少ないが、澤州県府城村玉皇廟内の咽喉殿、澤州県神南村東岳廟内の咽喉廟、陵川県礼義鎮東陳丈溝の咽喉祠などを調査できた。神南村の咽喉廟は、のどの病気を治す神となって広範な祈願者が参拝する状況になっていた。特定の階級が崇拜する神霊という性格を離れて、治病神として広く信者を獲得していく宗教現象から、民間信仰の世俗的な変容と浸透過程を考察できた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

櫻井 龍彦、楽戸の神「咽喉神」とその祠廟について、ククロス：国際コミュニケーション論集、査読有、15号、2018年、1-22。

櫻井 龍彦、日本の山神、中国山地民族研究集刊、査読有、総第4期、2016年、3-24。  
ISBN : 978-7-5097-7974-3

〔学会発表〕(計 2 件)

櫻井 龍彦、歴史学和民俗学的交渉 尋究其方法論的融合、山東大学歴史文化学院跨文化的歴史教学工作坊会議、2018年

櫻井 龍彦、民俗学与現代社会 作為学科的功能与使命、広州大学引智項目招待講演、2016年

## 6. 研究組織

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：段 友文

ローマ字氏名：(Duan Youwen)

研究協力者氏名：趙 彦民

ローマ字氏名：(Zhao Yanmin)

研究協力者氏名：薛 文旭

ローマ字氏名：(Xue Wenxu)